

六 教育・文化

1 藩 学

(一) 〔稽古堂記〕 中央大学図書館蔵

旧豊岡藩文武校興廢始末

豊岡士族久保田精一謹記

旧豊岡藩ハ、寛文八年五月旧藩知事従五位京極高厚八世ノ祖従五位下伊勢守京極高盛ノ丹後ヨリ移封スル所ニシテ、従来文武ノ士無シト為サ、レトモ、其学校ヲ設ケ以テ之ヲ奨励スルハ高厚ノ父甲斐守従五位下高行ヲ以テ始トス、高行天保二年ヲ以テ封ヲ襲キ廉耻ヲ尚ヒ礼讓ヲ厚クシ孝義ヲ奨メ気節ヲ励マシ風俗ヲ匡正スルヲ以テ務ト為シ、首トシテ学校ヲ建設ス、其豊岡ニ

於ルヤ、毎歳阿濃津藩儒官近江人猪飼彦博ヲ請ヒ、又屢々本国処士池田禎蔵(草庵)ヲ招キ経ヲ講セシメ、京都処士原田道立ヲ召シ心学ヲ説カシメ、備中処士国富探道ヲ招キ之ヲ客トシ大ニ火技ヲ興シ、其江戸藩邸ニ於ルヤ和歌山藩儒官遠藤泰通ヲ延キ経ヲ講シ、中村藩士草野半右衛門ヲ招キ兵法ヲ演フ、時ニ疲弊困窮ノ後ヲ承ケ用度給セス、自ラ奉スル甚儉、綿衣菜羹、往々人ノ堪ヘサル所多クシテ、而シテ文武ノ業ニ費スニ至テハ千金蓄ム所無シ、加フルニ執政ノ臣舟木外記等アリ能ク其拳ヲ贊襄シ躬親ヲ卒先誘掖スルヲ以テス、於是乎文武ノ道鬱然トシテ興起ス矣、高厚弘化四年ヲ以テ封ヲ襲ク、爾来国家日ニ多事文武益々用アリ、是ニ於テ復大ニ文武ヲ奨励シ江戸ニ朝スレハ則遠藤泰通ヲ師トシ、大阪ニ役スレハ則其碩儒藤沢甫ニ学ヒ、豊岡ニ在レハ則経筵ヲ開キテ池田禎蔵ヲ延キ、洋学ヲ興シテ本國医師岡田松亭ヲ召シ、国学ヲ講シテ神官宮本池臣ヲ迎へ、

撃劔ヲ一新シテ元水戸藩士金子健四郎ヲ雇ヒ、書法ヲ

勤メテ京人平井金弥ヲ留メ、雅楽ヲ立テテ大藪人森島

春眠ヲ師トシ、女学校ヲ興シ以テ婦徳ヲ養成シ、郷学

校ヲ設テ以テ邑ニ不学ノ戸無キヲ期シ、又、遊学ノ臣

ヲ派遣シ博ク実用ノ学ヲ求ム、加フルニ執政ノ臣猪子

清等アリ、躬親ラ諸生歩卒ト労苦ヲ同クシ以テ之ヲ激

励作新ス、於是乎皇政維新ノ際ニ至リ継述ノ業稍緒ニ

就クヲ得、夫ノ因循萎靡ノ弊習一洗、将サニ日有ラン

トシテ而シテ明治四年十一月旧豊岡県廢シテ文武校モ

亦遂ニ皆廢ス、然リトイヘトモ高行・高厚五十年薰陶

ノ久キ今日、聖明ノ盛世ニ遇テ旧藩士民ノ朝ニ立ツモ

ノ・野ニ在ルモノ・務ヲ兵ニ奉スルモノ・事ニ学ニ從

フモノ猶或ハ人無シト為ササレハ則其校廢スレトモ其

勤劳ハ以テ不朽ニ伝フヘシ矣、今親ク見聞スル所ニ掬

リ之ヲ古老ニ問ヒ、之ヲ旧記ニ徴シ、其事実ヲ審覈シ

テ其梗概ヲ左ニ挙ク、

文学校五

第一 稽古堂

名称 稽古堂

位地 但馬国城崎郡豊岡ニアリ、天保四年二月廿二日

豊岡藩主京極高行始テ其館内ニ仮堂ヲ設ケ、三月十

九日開堂ノ式ヲ行フ、天保六年春新ニ地ヲ郭内東庭

ニトシ堂ヲ築ク、夏ニ至リ成ル、五月五日猪飼彦博

京師ヨリ至ルニ会シ開堂ノ式ヲ行ヒ此ニ移ル、明治

二年三月藩主京極高厚生徒日ニ進ミ旧堂ヲ以テ之ヲ

容ル、ニ足ラサルヲ憂ヒ、遂ニ朝廷ノ允許ヲ得テ郭

南梵宇興国寺元禄年中高厚七世ノ祖高住ノ創建スル所、僧高泉

ヲ用ヒモ他ヲ廢シ、更ニ稽古堂ト称シ此ニ移ル、此

地ヤ三面山ヲ負ヒ一面大池ニ臨ミ堂宇広潤數百人ヲ

容ルヘシ、明治四年十一月元豊岡県ヲ廢スルニ因リ

十五日ヲ以テ之ヲ閉チ、堂宇書籍器什之ヲ新豊岡県

ニ交付ス、明年六月十五日火ヲ失シ尽ク烏有ニ歸ス、

今豊岡南本町ニ属シ懲役場ト為ルモノ其旧址也、東
庭ノ旧堂ハ之ヲ女学校ト為シ、後チ仮県庁ト為ス、

新庁成ルニ及ヒ之ヲ毀ツ、今豊岡豊田町ノ中央其旧
址也、

職員

文武掛一人 掌総判文武政、始メ重臣之ヲ兼ヌ、明

治二年文武局執政ヲ置ク、後參事ヲ以テ之ヲ兼ヌ、

学校奉行無定員 掌監督釐治・校中庶事、始メ大目

付之ヲ兼ヌ、後文武方ヲ置ク、明治三年大属ヲ置

ク、尋キニ之ヲ学長ニ併ス、

学長同上 掌教導生徒・出納・書冊整理・教授方

法・凡校中之事無所不与、開明治三年改掌教導生

徒・編修藩史・勘署文案・論議政治・得失釐治・

校中庶事、

句読司同上 掌授句読於生徒、

容儀司同上 掌整齋容儀・拳正非違・兼勘計用度、

後別ニ少属ヲ置キ用度ノ事ヲ掌ル、尋キ復之ヲ併
ス、

諸礼世話方同上 掌教授諸礼式、

書学教授 同助教同上 掌教授書法、

計学教授 同助教同上 掌教授算術、

生徒

生徒之ヲ五寮ニ分チ四級ト為ス、

一 童蒙寮 始メテ入学スルモノ此ニ入ル、

二 志学寮 童蒙寮ノ課程ヲ卒業スルモノ此ニ入ル、

三 後進寮 志学寮ノ課程ヲ卒業スルモノ此ニ入ル、

四 先進寮 後進寮ノ課程ヲ卒業スルモノ此ニ入ル、

句読司ニ擢用ス、

五 星聚寮 士族ニ非ルモノ即卒平民ヲ入ル、所也、

之ヲ四等ニ分ツ、

四等 童蒙寮ニ同シ、

三等 志学寮ニ同シ、

二等 後進寮ニ同シ、

一等 先進寮ニ同シ、

生徒ノ數開校ノ始ニ在テハ三四十名ニ過キス、戊辰前後ニ在テハ百六十余人ノ多キニ至レリ、内士族三分ノ二ニ居ル、

学科

漢学程朱ノ学ヲ主トス後、礼儀・洋学・音楽・書計・国学ヲ

建ツ、其学長ニ任スルモノ藩士久保田伊平生徒取締専務・

中田立卿・下村彦総・岡右内・久保田小平次・猪

子清・久保田精一トス、

礼儀 弘化二年十月始メテ伊藤善蔵ニ命シ小笠原流

諸礼ヲ生徒ニ授ケシム、後廃ス、

洋学 安政二年三月、本国医師岡田松亭ヲ召シ蘭学

ヲ教授セシム、後廃ス、

雅楽 建校以来之レ有リトイヘトモわざひ纒ニ毎歲春秋

奠ニ用キルノミ、明治二年森島春眠ヲ召シ教授セ

シム、爾來課ヲ設ケ以テ之ヲ習フ、

書学 建校以来毎月一次清書・毎歲二次ノ席書アル

ノミ、明治元年始メテ世話方ヲ置キ三年四月教

授・助教ヲ置ク、本井総次郎等助教タリ、又元久

美浜県官員平井金弥ヲ召シ専修生徒之ニ就キ学ハ

シム、

計学 明治三年四月始メテ教授・助教ヲ置ク、竹島

剛甫教授タリ、

国学 明治三年十月始メテ国学ヲ置ク、香川蔭樹ノ

門人宮本池臣ヲ召シ師ト為ス、

教則

童蒙寮生 凡三年課

日課 素読・習字・算術・修身談講

読本 三字経・孝経・論語・大学・中庸・孟子・

小学

志学寮生 凡二年課

日課 素読・習字・算術・修身談聴・詩文

読本 五経

後進寮生 凡三年課

日課 素読・輪読・独見・聴講・輪講・詩文・

習字・算術・奏樂

読本 左伝・史記・漢書文選・日本政記・外史・

宋名臣言行録等

学力 簡易ナル歴史、即十八史略・元明史略・政

記・外史ノ類及ヒ小学外篇ノ大意ヲ解シ得、

平易ナル詩文ヲ作り得ルニ至ルヘシ、

先進寮生 凡三年課

日課 後進生ニ同シ、且句読司ノ助手タルコトア

ルヘシ、

読本 後漢以後ノ諸史・文章軌範・八家文・歴代

名臣奏議等

学力 諸歴史・四書・小学ノ大意ヲ解シ得、普通

ノ詩文ヲ作り得ルニ至ルヘシ、

星聚寮生

四等 スヘテ上ノ四寮ト同シ、

三等

二等

一等

説書学長ノ講義也 毎月二次、藩主重臣以下士族及子弟尽

ク登堂シ聴講ス、

臨試 毎年一次、藩主親ラ臨ミ生徒ヲ課試ス、

監試 毎月二次、(年々)重臣之ニ臨ミ生徒ヲ課試ス、

呈覽 毎月十五日、句読司以下皆詩文及ヒ清書ヲ藩

主ニ呈覽ス、

試考 漢学課ハ毎年三月・九月小考シ、七月・十二

月大考ス、書計ハ七月・十二月試業シテ優劣ヲ定ム、

時間 午前六時ニ業ニ就キ午後九時ニ業ヲ終フ、

休日 朔日・十五日トス、後日曜日ニ改ム、

凡士族子弟年七歳ニ及フトキハ必入学セシム、若シ無故シテ入学セサルモノハ文武掛ノ命ヲ受ケテ学校奉行之ヲ責問ス、其生徒故無く不参スルモノモ亦同シ、病ヲ告ケテ不参スル生徒ハ不参中ハ己レノ門外ニ出ルヲ許サス、

士族ニ非ルモノ、或ハ他藩ノモノトイヘトモ入学ヲ乞フトキハ之ヲ許ス、

凡生徒論語一部ノ大義ニ通スルニ非レハ妄ニ退校スルヲ許サス、

生徒ノ升寮ハ学長之ヲ学校奉行ニ具状シ、奉行之ヲ文武掛ニ稟シテ後之ヲ命ス、其勤学生徒ニ賞ヲ与フルモ亦然リ、

十五歳以下ノ幼生ハ毎年七月十二月之ヲ賞スルニ紙ヲ以テシテ其勤業ヲ奨励シ、十五歳以上ノモノハ十月ニ金ヲ与ヘテ之ヲ賞ス、

生徒ニ寄宿生アリ、通学生アリ、通学生トイヘトモ童蒙生及十三年未滿ノモノヲ除クノ外ハ日夜来リ校ニアリ特ニ夜宿セサルヲ異トナスノミ、

生徒十三歳以上ノモノ毎日交番シテ役ヲ執ル、日掌辰・日掌掃・日掌燈・日掌浴、又別ニ年長スルモノヲ選ヒ直日生ト称シ、上ノ四掌ヲ指揮シ塾中ノ瑣事ヲ記セシム、

生徒左伝或ハ史記或ハ漢書ノ大意ニ通スル以上ノモノヲ選ヒ学資ヲ給シ游学セシム、開校以來続々派出シ戊辰前後ニ在テハ其數二十余名ニ及ヘリ、其内専ラ洋学ニ従事セシムルモノ蓋七八人、

毎年二月・八月上丁ノ日ヲ以テ藩主親ヲ孔子ニ積奠ス、礼畢リ宴ヲ賜フ、祭ヲ助クルノ職員ハ祭酒一人後藩主自ヲ行フヲ、奉礼一人・読祝一人・講經一人・主事以テ之ヲ廢ス、

一人・容儀司一人・齋郎二人・楽師一人・楽工定員無シ、介者一人・守薦一人・給仕二人也、

学費 学費ハスヘテ藩庫ノ支給ニ係ル、生徒隨身ノ具、

即几家・筆・紙・書籍ノ類ハ皆自ラ之ヲ弁セシムト

イヘトモ大部ノ書ハ皆之ヲ貸与ス、且直宿ノ職員ハ

食ヲ給ス、寄宿生モ亦食ヲ給シ或ハ其幾分ヲ助クル

コトアリ、薪炭油及ヒ堂宇ノ修繕・校内一切ノ費

用・職員ノ給俸・遊学生雇教師ノ給料・書籍ノ代価

等ヲ合算スレハ一歳費用二千円ニ下ラス、後チ興國

寺ヲ廃スルニ及ヒ元之ニ寄附セル田五十石ヲ以テ学

田ト為シ、其不足ハ旧ニ仍リ藩庫ヨリ之ヲ補フ、

稽古堂揭示 日野二位ノ書、猪飼・遠藤二氏ノ文アリ、

建学ノ本意ヲ明カニスルニ足ル、(中略)

第二 稽古堂

名称 稽古堂

位地 江戸^(題)糺町二丁目豊岡藩邸ニ在リ、亦天保ノ初年

藩主京極高行ノ建ル所也、文久二年藩主ノ家族及群

臣ノ家族皆豊岡ニ移ルヲ以テ遂ニ廃ス、今東京糺町

区陸軍本病院ノ北部即チ旧邸址也、

学科及諸則 豊岡稽古堂ト同シ、特ニ規模狭小ナルヲ

異ト為スノミ、生徒ノ数モ常ニ二十余名ニ過キス、

第三 含章舎

名称 含章舎

位地 豊岡郭内南谷ニ在リ、亦天保ノ初年藩主京極高

行ノ建ル所也、後廃ス、今豊岡南本町十番地角野某

ノ宅是也、

学科 心学京人原田道立・藩士四方小左衛門等講師タ

リ、開講毎月数次、藩士及子弟皆参聴ス、又市街郡

村ニ数々講師ヲ派出シ教諭セシム、故ニ当时卒平民

中ニモ亦往々心学ニ従事スルモノアリ、

第四 (マ)

名称 ^(女ん)女学校

位地 豊岡郭内東庭旧稽古堂也、明治三年春藩知事京

極高厚ノ創建スル所也、明年十一月旧豊岡県廃スル

世　ニ遇ヒ遂ニ麁ス、

近　職員

総理一人　知事夫人自行之、

取締兼諸礼師一人　伊藤善三

漢学師一人　稽古堂学長久保田精一兼之、

国学者一人　宮本池臣

読書・習字兼裁縫師六人　舟木三保子・猪子礼子・

木下保野子・舟木英子・堀喜志子・田村与字子、

皆旧重臣妻而年老者、

習字師一人　竹島総太夫

生徒　四十人、皆六歳以上十六歳以下ニシテ尽ク士族

ノ女也、

学科

国学・漢学・諸礼・習字裁縫・雅楽

教則

読書　女大学・女今川・女庭訓・女用文章・百人

首・古今集・女誠・孝経・小学ノ類

習字

裁縫

聴講

国書・漢書

漢書ハ女子修身ノ
講談ヲ主トス、

礼儀付婦言婦容

作文

詠歌

奏楽　未興而止、

右其大約也、蓋女子教育ノ世教ニ関スル甚大ナルハ固

ヨリ言ヲ待タス、而シテ当時文部ノ学制未タ頒タス歐

米ノ教法未タ之ヲ詳カニセス、是ヲ以テ女子教育ノ法

全日本国ヲ拳ケテ寥々聞ク無シ、高厚深ク此ニ憂フル

アリ、姑ク試ニ此学校ヲ設ケ以テ婦徳ヲ養成スルノ端

緒ヲ為ス、爾来一年有余功效奏スル有リ、女子ノ風俗

稍昔日ニ同シカラサルモノアルヲ覚フ、於是乎愈々当

初目的ノ果シテ誤ラサルヲ信シ將サニ以テ漸次教法ヲ

改良シ終ニ完全ノ教育ヲ成就セントシテ、而テ世勢変
迂遂ニ靡絶ス、実ニ婦女子不幸中ノ大不幸、藩政可惜
中ノ大可惜ト謂フヘキノミ、

第五 小学校

名称 小学校 稽古堂ヲ以テ大学ニ当ツ、
故ニ之ヲ小学校ト云フ、

位地 豊岡寺町立正寺内ニ在リ、明治三年豊岡藩知事
京極高厚市街村落不学ノ子弟多キヲ憫ミ、立正寺住
僧ニ論シ其屋宇ノ一部ヲ借り、先ツ市街小学校ヲ設
ケ、七月十八日ヲ以テ開校ス、将サニ以テ漸次拡張
シ闔境不学ノ戸ナカラシメントスル也、明年十一月
旧豊岡県廢スルニ遇ヒ遂ニ廢ス、

職員

取締一人 津山麓

国学者一人 宮本池臣

書学者二人 京人平井欽弥・藩士高橋九十郎

世話掛数人 以市街中富人有人望者充之、

生徒 百三十人

学課

読書 三字経・孝経・四書・小学・五経・外史・童

子経・実語経・消息往来・商売往来ノ類

算術

習字 諸往来・名頭・字村名町名国名状之文ノ類ス

ヘテ商家必用ノモノ

作文

修身談

校費 民費ヲ主トシテ藩庫之ヲ助ケ、職員中世話掛ノ

外ハ大抵藩費トス、

此ノ校ハ常ニ稽古堂ト脈絡相通シ、学長モ時々出席講
談ス、此校ニ於テ学業秀出スルモノハ之ヲ稽古堂ニ升
ホス、開校（開校）纔ニ一年余ナルヲ以テ未タ功ヲ見ル能ハサ
レトモ、市街人民始メテ小学校ナルモノ有ルヲ知ルハ
此校ノ建設ニ由テナリ、

武学校四

第一 外斉武寮

名称 外斉武寮 始メ槍劔稽古場ト称ス、天保五年二月整武寮ト名ク、八年正月又更メテ外斉武寮ト称ス、

後之ヲ内斉武寮ニ併ス、

位地 但馬豊岡郭内本町東尽北角ニ在リ、蓋寛政文化

ノ間藩主從五位下飛驒守京極高有旧藩知事從五位高厚ノ祖父ノ建ル

所也、後藩主京極高厚之ヲ内斉武寮ニ併ス、今豊岡

豊田町北郭ノ西側其旧址也、

職員及諸則 第一二三校ヲ連ネ第三ノ下ニ於テ合セテ

之ヲ記載スヘシ、

第二 内斉武寮

名称 内斉武寮 始メ弓砲馬見所ト称ス、天保八年正月此名ニ改ム、

位地 但馬豊岡郭内東庭ニ在リ、稽古堂ト相並フ、建

設年月蓋外斉武寮ト相近シ、天保六年京極高厚其規

模ヲ大ニシ新タニ之ヲ作ル、八月四日成ル、後外斉

武寮ヲ合併シ諸武芸尽ク此ニ於テ演習ス、明治四年

十一月廃ス、旧址稽古堂ト同シ上ニ詳カ也、

第三 山王下稽古場

名称 山王下稽古場

位地 豊岡郭内山王下ニ在リ、天保ノ初年京極高厚ノ

建ル所、以テ足輕・郷足輕武芸演習ノ場ト為ス、安

政年中之ヲ内斉武寮ニ併セ士族ノ居宅ト為ス、今豊

岡北本町四十五六七番地是也、

職員以下三校ヲ合セ記ス、

文武掛一人 稽古堂ノ下ニ詳也、

文武方無定員 掌釐治監督寮内庶事、始メ大目付ヲ

以テ之ヲ兼ス、後文武方ヲ置ク、明治三年四月之

ヲ小隊長ニ併ス、

教授無定員 各科皆置之、掌教導生徒整理場内、始

メ指南ト称ス、此称蓋古ヨリ之レ有リ、皆私々々(マコ)、

然ルニ其師ノ皆伝ヲ得シモノニ非レハ之ヲ称スルヲ得サル也、

皆私ニ其伝習スル所ヲ以テ人ニ教フルモノニシテ、藩主ノ命スル所ニ非ス、

天保三年正月三日京極高行始メテ大ニ文武奨励ノ命ヲ発シ因テ砲術指南和田垣大記・槍劍指南久保田伊平ヲ賞ス、七年十一月三日和田垣大記ヲ砲術師範ニ、久保田伊平ヲ槍劍術師範ニ、田路初右衛門後千葉新左衛門ト改ムヲ弓術師範ニ命ス、是ヲ師範ヲ命スルノ始ト為ス、明治二年二月教授ヲ置ク、

助教同上 各科皆置之、掌璽教授々々助教、或ハ並ヘ置キ或ハ一ヲ欠ク、始メ世話方ト称ス、明治二年二月助教ヲ置ク、

生徒 士族ハ武ヲ以テ禄ヲ食ムモノナレハ闔藩皆之ヲ生徒ト云フモ亦可ナルヘシ、然ルニ太平ノ久キ往々武ヲ廢スルヲ免レス、天保ノ初年高行大ニ武

ヲ奨励スルヨリ以来高厚ノ復々鼓舞倦マサルヲ以テシ士卒皆發憤興起シ遂ニ武士ノ面目ヲ回復スルニ至レリ、

生徒ハ通学ヲ常トス、然ルニ時々寄宿シテ專修スルコトアリ、

生徒ハ元ト士族ヲ主トス、天保七年卒ニ命シ必ス武芸ニ従事セシム、此時猶士族ト場ヲ異ニス、後之ヲ合ス、

別ニ郷足輕ナル者有リ、以テ戦時ノ用ニ備フ、毎歳数次之ヲ徵集シテ武芸ヲ習ハシム

学科

槍劍 文化年中藩士谷口十郎左衛門指南タリ、之ヲ久保田伊平ニ伝フ、伊平天保七年命セラレ師範ト為ル、槍術ハ木下八郎太夫・古島誠助師範ヲ継キ、劍術ハ佐藤大助師範ヲ継ク、

弓 文政ノ間ヨリ勝田佐次右衛門等之ヲ世話ス、天

保ノ初田路初右衛門指南タリ、天保(七カ)年命

セラレ師範ト為ル、後廢ス、

砲 延宝真享ノ頃、新村寛左衛門ナルモノアリ、稲

留流ノ砲術ヲ指南ス、後徴々振ハス、文政ノ頃ヨ

リ和田垣大記荻野流砲術ヲ指南ス、天保七年命セ

ラレテ師範ト為ル、其子伊太夫之ヲ継ク、時ニ砲

術師備中人国富探道来リ客タリ、火技益々開ク、

安政六年国富虎五郎師範ヲ継ク、明治二年歩兵教

授・砲兵助教ヲ置キ砲術師範ヲ廢ス、和田垣讓歩

兵教授兼砲兵助教タリ、久保田精一步兵教授タリ、

馬 文政頃ヨリ伊藤菴之ヲ世話ス、高階八右衛門之

ヲ承ク、明治三年騎兵教授ヲ置キ世話方ヲ廢ス、

又軍馬術アリ、後廢ス、

捕手 天保十四年三月古島良平ニ命シ荒木流捕手師

範ト為ス、文久三年正月喜多村協師範ヲ承ク、又

平六流アリ、弘化年中ヨリ之ヲ置ク、和田源太左

衛門之ヲ世話ス、後廢ス、

柔 天保以前ヨリ之レアリ、前波平馬・添田儀左衛

門之ヲ世話ス、後廢ス、

居合 天保ノ初年ヨリ竹島総太夫之ヲ世話ス、後廢

ス、

貝 全上

太鼓 弘化年中木村重藏之ヲ世話ス、後廢ス、

繩 天保ノ初年ヨリ四方小左衛門之ヲ世話シ、足輕

ニ教フ、後廢ス、

棒 卒安田熊右衛門足輕ニ教フ、後廢ス、

三道具 卒秋田勝平足輕ニ教フ、後廢ス、

校費 自己必用ノ道具即槍劍道具ノ類ハ自ラ之ヲ弁セ

シム、其貧困ノモノハ或ハ之ヲ貸与シ或ハ金ヲ貸与

シテ之ヲ買ハシム、其他ハスヘテ藩費トス、其尤大

ナルモノハ太砲手及歩兵ノ発火也、加フルニ歳末歳

首ノ賞典・卒ノ増給・器械ノ修造等ヲ以テシ、藩ノ

歳入ノ大半ハ常ニ武芸ノ費用タリ、

第四 稽古場

名称 稽古場

位地 江戸糺町二丁目豊岡藩邸ニ在リ、建設年月大抵

豊岡内斉武寮ト同シ、文久二年十一月廃ス、

学科諸則 大抵豊岡内斉武寮ト同シ、特ニ規模狭小ニ

シテ生徒モ亦寡少ナルヲ異ト為スノミ、然ルニ槍劍

砲術ノ盛ナルハ決シテ豊岡ニ下ラサル也、

○『日本教育史資料』によると、「文武校始末」は明治十五年十二月記。同十六年以降の文部省『教育沿革史』の原本となつたものと見られる。

孝経 四書 小学 五経 左氏伝

四書五経小学素読すみ候は

ば左伝は素読に及申間敷候、

解了順

小学 孝経 大学 論語 孟子 中庸 近思録

五経 歴史

左氏伝は春秋の伝にて五経の内
に籠候、

右の通、業を畢候迄は於稽古堂他書を読候事を禁

ず、右相終候後は勝手次第の事、

近思録は道理六ヶ敷候、四書の次に可然、

(二) 〔舟木家文書〕 舟木直温氏蔵

(1) 稽古堂学則

(2) 稽古堂学制

一 諸士の子弟七歳已上入学可有之候、其已前父或は兄より世話役へ申達し夫より大御目附へ申達、当番の

素読順

世

重役承届候上、諸生の中相頼同伴登堂可有之事、

近

一 諸生の面々論語一部の大義を弁候迄は無故て退席不

相成候、其数重役御大目付并学长相改候上、勝手に

退引可有之事、

一 諸寮

先進寮 後進寮

求友寮 発蒙寮

容儀司已下席順

年始五節句式日、积菜の節は格式或は父の格式官位

を以、了叙、説書の節は長幼を以可叙、会説輪講の

節は学文優劣并月旦評上達を以、可叙、平常素説の

節は格式を以、了叙、并社家医師は定席童蒙寮、

一 諸生病気其外怠、世話役へ趣意以書付可相届、其段

世話役より大御目付へ可申達、無故怠の者は其数重

役へ可申達事、

但、幼年の者は病気怠中戸外無用、

〔付紙〕但、無抛用向の節は、月に三度不参勝手次第且、

病気怠中無断門外可為無用事」

一 諸士門外人たり共説書の日出席勝手次第、小頭已下

たり共為聴聞登堂指免し可申候、尤客坐を設置并小

頭已下の者は襖を隔、坐を可設事、

一 儒書の外雑物玩弄の品不許登堂、武器たり共同断、

一 积菜の節、祭酒当番の重役可相勤候事、并役割大御

目付を以可申渡候、

学寮昇進の次第

一 発蒙寮

七才入学の者此寮へ入、初て入門の者、学文浅深に

不抱一旦此寮へ入、月旦評にて昇進、

一 求友寮

三字経済者、此寮へ入、

一 後進寮

大学・中庸・論語済者、此寮へ入、

一 先進寮

孟子済み少づつ解了出来候者、此寮へ入、孟子済といへとも解了不出来者は、矢張後進寮に可罷在事、

研究の次第

井月旦評の法

朔日

拜礼畢諸生各惣拜の後、温書吟味可否月旦評に入、

○印誌す、

四九日

申刻より自分温習、晩方より夜に入、輪講月旦評に入、可否○印、

六日

午後輪講、可否○印、月旦評に入、

十一日

説書

十四日

一統終業の書吟味法有、可否○印、月旦評に入、

十五日

拜礼如朔、詩会宿題匿名、或は復文、

十六日

温書如朔、

二十一日

如六日

二十六日

説書

一質問と号、臨時に月に三度位出会、説書并輪講共、前日聴聞の処学長より再難問す、答宜者は帳面名前の上に○印控置候事、

但、上席の人答兼候へば次席へ問、次第に問及す、一統答兼候へば句読司へ問及す、

一 後進生問答難出来者は求友発蒙とおなじく容儀温

書等を以、○印控候事、

右学長・句読司・容儀司、各手帳に留、毎月下旬起

合相改、○印多少鑑察へ申達し、毎月朔日褒貶可有

之、此数無私可取扱事、

職掌

学長兼世話役

一 一階こ謙り師位明け置可申事、

一 説書輪講会頭可相勤事、

一 毎朝素読二人宛聞直し委曲可吟味事、

但、中田立馨欠席の節は句読司の内より一人出る事、

一 終業の書句読司起合相改、無故障候へば他書へ可相

移、若忘失有之候へば再び読せ可申事、

一 月旦評にて席黜陟素読増減、句読司・容儀司と照合

せ鑑察へ申達候上、朔日毎に相定可申事、

一 句読司欠席の節は先進寮生徒の中相撰助教可申付事、

一堂中の義、総て司の諸生の義、万端心を付、容儀の

世話・出席の有無・素読の吟味、就中火の元大切、

総て内外の義所不知無之候事、

一 御蔵書御預の事、

句読司

一 毎朝素読心を付、学長より出候月旦評通相守、句読

寛々と一人つつ丁寧に教授有致事、

一 前日の処遺忘の諸生へは当日素読為休、傍に置、終

朝復読させ可申事、

一 不覚の書物は教授不可致事、

一 月旦評・褒貶正路に可申談事、

一 火の元を掌、入念取計可申事、

一 容儀司と申談、五日づつ交代当番相立、出席懈怠帳

面記録方入念に可相勤事、但、無故怠候者吟味の事、

一 中田立警欠席の節は申談、一人素読聞直し吟味可相
勤事、

一 威儀正、礼讓厚、温潤敦厚の風可有之事、

一 句読司・容儀司申談、毎日一人づつ退堂後、火の元

見廻り可申事、

容儀司

一 出席中央に坐、進退動作可相正事、

一 学長より発蒙に至迄、無遠慮容儀可相正、於不改者

其段鑑察へ可申達事、

一 別帳を以、乱禁可相記候、追て月旦評の節無伏藏可
(懸)

評儀事、威儀正、礼讓厚、温潤敦厚の風可有之事、

説書の節一同帯劍の事、

礼讓の上一人宛進退可有之事、

席上、書論の外、雑語・書物裸にて所持・早読・席

上煙草・門外・欠伸・大咲(わらわ)・大音、禁制、

一堂中乱禁并門外にて乱行の者は学長と起合にて敢戒
め、其上不相改者鑑察へ可申達事、

一 句読司と申談、五日づつ交代当番相立、出席懈怠帳

記録方入念に可相勤事、

但、無故意の者吟味の事、

一 容儀司たり共持席定法の事、

○ 明治三年四月の「職制」によるものか。

(3) 日 課

御勤学日課

一 毎日常五時より九時迄御読書

大学 中庸 孝経 論語 孟子

小学 五経 左氏伝 国語 貞觀政要

右三十枚より以上、五経は五拾枚より以上、追々

御進益、右数より御減少は無之事、

文意義理御考、今日の御行状御相違は無之哉、御引

競再三御玩味第一の事、

一一、四、七の日 八時より弓術

但、雨天は指矢百本以上、追々御進益、

一二、五、八日 八時より馬術

但、雨天は半時指矢、半時御読書、馬は日送、

一三、六、九日 八時より鎗劔術、

但、雨天は右同、

一十の日三日 午時後講釈、

但、朝五時より当日講釈の章句註数回御後読の事、

雨天は右同、午時後は先会の章句数度御後読御玩

味の事、

一右の外御閑暇は、皇朝国史・歴史綱鑑、唐鑑・大学

衍義御覽、治乱興廃明主闇君の体、直言極諫忠臣義

士、巧言令色佞臣の体、并富国強兵諸家の随筆、嘉

言善行の仮名書等をも御覽、御心を被養候事、

(4) 日記

(表紙)

十月分

稽古堂日記

当番

谷口 協

学長

一ヶ月御用怠

久保田伊平

三日病用怠

中田立卿

十日より出府に付怠

皆勤

下村彦総

句読師(可)

五日出席

田村多門

其余は不参

皆勤

津山多仲

三日怠

十五日武用怠

古沢秀之助

容儀司

十五日武用怠

谷口協

先進寮

一ヶ月御用怠

和田垣競

後進寮

十二日怠

一日武用怠

一日不快怠

堀源五

三日怠り

八日武用怠

前波矩輔

十五日怠

一日炮用怠

国留寅五郎(寛)

四日怠

一日武用怠

阪本乙蔵

温書十三失

十六日武用怠

古島誠助

皆勤

温書七失

永野兵蔵

一ヶ月怠

木下廉三郎

十三日怠り

一日武用怠

尾藤左右助

十三日怠り

温書三失

竹島半三

皆勤

温書七失

永野唯蔵

二日怠り
温書二失

四方英助

十日怠り

一日疾怠

相阪(坂)千五郎

三日他行怠

志学寮

皆勤

温書五失

岡左右之助

皆勤

温書九失

田村幸吉

廿式日怠り

一ヶ月怠り

津田左兵衛

皆勤

温書九失

本井総次郎

廿一日怠り

和田豊蔵

津田留吉

皆勤
温書十式失

千葉半助

皆勤
温書十一失

久保田精一郎

皆勤
温書十式失

四方千太郎

童蒙寮

皆勤

温書九失

瀬能助之丞

皆勤

温書(マ)

坂本菊之助

同

一ヶ月怠

堀 監三

皆勤

温書六失

塚本安次郎

竹島右太郎

五日怠り
温書弑失

添田欣二

一十九日午刻より月並の御見分御座候、
一廿六日説書出席

五日怠り
一日疾怠
温書弑失

四方良蔵

猪子左家太
勝田小八郎

皆勤
温書
(ママ)

高木次郎

生駒伝左衛門
和田源太左衛門
伊藤善蔵

忌中に付半月怠
温書九失

岸田悦之助

神矢安八
相阪孫助
(坂)

一朔日、岡左右之助志学寮へ昇進被仰付候、
一十一日説書出席

勝田小八郎

一右被温書は懈怠故也、

右の通御座候、

学長共

生駒伝左衛門

生駒伝左衛門殿

永野喜兵衛

小林源八郎

○生徒で温書「おさらい」を懈怠した者には、失点が加えられてゐる。

(5) 藩主、学業御覽次第

文武御覽の次第書入

稽古堂学業御覽の次第

一 御玄関へ 当番重役一人

御先立 大御目付

御刀取 御近習役

御小姓

一同御間の内に平伏 老共

中老共

御用人共

一 君位へ

御着座、御茶・御煙草盆、御小姓差上之、

一 老共・中老共・御用人南の方御入側へ罷出、御目見

直に詰所へ引取、

一 諸生の面々兼て溜りへ揃置、都合宜旨学長より大御

目付へ申達、大御目付より月番へ相達、御模様相伺

相始候義、大御目付を以学長へ申通、重役共一統出座、先進寮北の窓下に着座、

一 学長二人

一 輪講一順

句読師(可)
容儀師(可)

一列に並、

但、書台銘々持出の事、

右畢て学長二人席を進み向合並ぶ、

一 童蒙寮の諸生一列に並、書台銘々持出る、

但、格式の順たるべし、

御給人已上の格式肩衣着用たるべし、

一 志学寮の諸生 右同断

但、右同断

一 后(後)進寮の諸生 右同断

但、右同断

一 先進寮の諸生 右同断

但、右同断

右畢て一統退去、暫御休息の事、

一 学長講の義御沙汰次第にて出座取計向、前の通、

一 見台容儀師出之、学長出座、右講釈の節、句読師・

容儀師始諸生一統聴聞の事、

右講釈相済、学長退座、見台引之、学長は持席へ可

罷在、

一 聴聞の面々着座の儘平伏可有之、

句読師^(可)

容儀師^(可)

先進寮以下

諸生一統へ

御意被仰出、御請御礼、御用番取合、右畢て一統退

出、

学長兩人へ

御意被仰出、右同断、

一 帰御の節、御文関へ御見送前の通、

但、学長句読師・容儀師^(可)の面々御構外へ平伏可致

事、

以上

天保七丙申年六月

○時の藩主、京極高行

(6) 池田草庵先生接遇

池田先生御待遇書付

三日

一 夕方見歩使帰次第、孰れも^(いす)麻上下着用、稽古堂へ出

席、

但、学校奉行・学長同断、

一 着の上、孰れも始及挨拶、御酒・御料理被差出相伴、

一 着早々御挨拶、御使者・御側役相勤候事、

四日

世
一 朝孰れも始為挨拶、稽古堂へ罷越候事、
近
一 昼後御頼御使者御側役にて相勤候事、

一 九時より孰れも始諸士一同登館、
但、孰れも并御側役麻上下着、

一同刻過、先生登館被致、御玄関迄学長誘引、
一 君公麻上下被為召、御使者の間御廊下辺へ御出迎、

孰れもは御式台御取次一人下座敷へ罷出、御側役誘
引御出迎の処より君公御誘引、御書院に於て御対面、
引統御慰斗・御茶・御煙草盆・火体差出畢て一旦御
退座に相成、孰れも罷出及挨拶候、

一 右畢て暫時休息被致候後、君公御出座、孰れも始諸
士一同御次へ罷出、講義聴聞、

一 講義相済一同退引、先生は御小座敷へ御誘引、御酒
被差出御閑談、何れも罷出御取持、

御献立

御吸物 硯蓋 差身

本膳

御平 御汁 御香物

御飯 御焼物

御茶・御菓子

一 右相済退引の節、被罷出候時の如し、
一 退引の上御挨拶、御使者御側役相勤候事、

五日

一 八時より於稽古堂講義有之、昨日の御挨拶旁被為入、
御聴聞被遊、孰れも始諸士一同聴聞の事、

但、平服、

六日

一朝於稽古堂講義有之、諸生伺聴聞、

一 八半時頃より先生御招に相成、学長中の口迄誘引、
夫より御側役誘引、何れも御椽側へ出迎、君公先日
の通御出迎、御小座敷へ御誘引、御料理被差出、孰
れも被為召御取持致候事、

但、先生へ御送物有之、

一 退引の節被罷出候時の如し、

七日

一朝婦村被致の時、御挨拶旁御暇乞御使者有之、

一 何れも并掛御役人暇乞に罷越候事、

○ 池田草庵が初めて豊岡藩校に招かれたのは元治元年十一月十一日である。(七二六ページ参照)

2 文 学

(一) 「京極家乗 先世詞藻」〈抄〉

横浜市・京極高晴氏蔵

○ 高住公歌集

立春

雪もよひくもると見しもうすかすみけさはまことの
はるや立らん

但馬国にてとしこしける春の始に

今朝よりはこゝろを花にうつし見ん年波こゆる雪の

しら浜

試筆

百とせのなかばにみつのはじめよりなを行末のはる
もかぞへん

初春

一夜明て去年をへだつる横雲のたなびく方や先霞ら
ん

初春霞試筆

今朝は猶霞にこめてむさし野の行末とをきはるやい
く春

契多春試筆

千代に猶八千世をそへて末とをく春くははれるはる
は来にけり

岩戸明し光かはらでいづる日の今も神代の春は来に
けり

世 近

一夜明て竹の宮古のはる毎に幣とる道の恵をぞ思ふ

早春山

春あさきあさなあさな霞にも花咲なばと見よしの

山

連峰霞

きのふには立こそかはれ朝がすみかさなるみねのおも影もなし

海上霞

沖津浪かすむそなたの夕なぎにちかくてとをくかへる友ぶね

若菜

袖の雪はらふ裾野の朝風に春ともいまだわかなつまし

秋夜

いく寢覚身の愚さをなげけとて秋は夜長き物となり

けり

相州白旗明神奉納百首冷泉為綱卿出題の内、春

曙といふ事を別当勤をせしに

今ぞおもふ人起出るとこ闇の神代はしらず春のあけ

ぼの

弘福寺にまふで

法の水にごりにしまですみ田川世のうき瀬をもしらぬ賢さ

○弘福寺は江戸牛島にあり、高住没後の墓所となった。

河つらを詠やりて

問ばやな今住人にすみだ川水に数かく代々の言葉も

人の算賀に 菊有長生種といふ題を得て

わかゞへる春は二葉に千々の秋老せぬ菊の花をこそみめ

重陽

生交る千種はいはし今日毎に齢をのべの菊の一はなつれなさに打向ひてはいかり猪の二道かけぬこゝろ

とをしれ

時 雨 稲荷社奉納之内

天の川雲路へだつる夕浪も音はまぢかくしぐれ来に
けり

○高永公詩草

夏晚即興

極目坐涼風 新詩渺々中 西山雨初影 錦繡晚霞紅

秋日白河侯宇土侯枉駕于小邸、至期宇土侯以病

不至、恵以詩及美酒菊花、次韻謝之、

瓊瑤兼菊酒 堪愛雨余中 彭沢秋園会 憶君情不窮

山 家

竹翠松青暮靄開 秋風拄杖独徘徊 簾門早晚無人訪

只有山雲去又来

○高永公詠草

立春朝

山端をいづる朝日もほのくとかすみにくめて春や
たつらん

春 雪

ふりそめしこそぞのけしきとみゆる哉はつかにのこる

庭のしら雪

湖 霞

浦山もそれかとばかり霞来てあかぬながめを志賀の

から崎

初 鶯

このうちもおなじ恵のはるぞとはつ音つけくるや

どの鶯

春 草

降雨に野辺のしら雪うち解てみどりをそくぐはるの

若草

帰雁知春

風さへて霞もやらぬそらながら(お)のが時とやかへる

かりがね

禁中花

玉敷のみきりの花は春をへて世にたぐひなきいろか
そふらし

社頭花

盛なるはなのしらゆふかけまくもかしこき神の手向
してまし

竹為友

すぐならぬ身のおもひをばいかゞせん友なふ竹の世
々をかけても

花如雪

散行もつもるも雪の面かけにたつ田の山の花のよそ
めは

夕苗代

あらふ田を夕月のかげやどるまでかへすや賤がなは
しろの水

にぎりなきよにもあるかな夕日かげかすむ山田のな

はしろのみづ

○高有公咏草

谷 鶯

雪氷まだ解やらぬ谷の戸におのれ春なる鶯のこゑ

待郭公

待ぞとはしらずやいかに時鳥誰が為おしむ初音なる
らん

古郷橋

古郷の軒の立花咲にけり誰が袖ふれし薫なるらん

叢 螢

あつさをも忘れにけらし飛螢涼しくてらす露の草村くさむら

誰もけふ身のうき波の御被して河瀬涼しくながす麻

の葉

早 秋

朝まだきまたきに立し秋ぞとは庭の浅茅の露に見え

けり

萩 露

咲にけり庭にも野べの小男鹿(まおしか)を任せてみばや露の秋

萩

女郎花

女郎花色ある野べによし一夜かりねの枕露深くとも

鷹 狩

風寒み帰るさいそぐ狩衣くるゝ野末にきゝす立なり

積 雪

趾つけてたれかは問はん此朝け道もなき迄つもる白

雪

寄月恋

待侘て涙かたしく我袖にやどるもうしや夜半の月影

寄風恋

待侘て暮る夜毎の闔の戸にそよとの風の音信もなし

寄海恋

いたづらに袖のみぬれて見るめなきあふみの海の名
こそつれなき

女郎花

女郎花おまかる野べに宿からんよしやあたる名に
は立とも

○高厚公

舞鶴なる見樹寺の家廟に詣でゝ

すぎし世はかくありけんとしのばれてすゞろにしほ
る袖の露かな

殉死五臣の墓を掃ひて

おしわけて袖ぬらしけり草の露

野に遺賢てふ言葉をおもひやりて

手折らずば浮世も知らじ山桜

旧領より恙なく帰杖せしをよろこびて

田の無事を土産嘶や里の秋

夜雪の病気全快を祝ひて

病葉の痛みは見えず帰り花

自笑庵君の還曆を祝ひて

寿は百事如意の基よ菊長者

秋ならで身にしむかねや出代る日

旗本に井伊本多あり冬牡丹

鎌倉へ一鞭当てる霞む朝

逃げ足に蹴放す木戸や蜂の竿

ちと早い簾釣らせて初袷

皇の国の光りぞ黄金菊

鎗持の肩で風切る野分かな

迷はぬは老馬の功や雪の原

○高厚・高義については、年代が明治・大正にもかわるものであるが続けてここに収める。なお、六代高品の詠草はこの集には収められていないが、舟木家文書の断簡に数首を見る。

○高義公遺詠(詠)

公詠ズル所極テ多シ、不幸ニ

シテ大正癸亥ノ災草本悉ク烏有トナル、真ニ惜

ムベシ、今遺詠五首ヲ得タリ、即チ左ノ如シ、

錢撒けば倦る日のなし秋の旅

臆あじきし梧の一片にかてゝ鉦

筋書を読む頬杖の火鉢かな

床山あつらへ詠まげへ鬢まげや雛の客

短夜や玉露一服宵の罪

○高永公夫人細川氏(梅寿院)

寄道祝

あふげ猶道のをしへの世々たえずいやさかへ行やま

と言の葉

もろともに猶こそあふげ敷しまやさかふる道のすえ

ぞ尽せぬ

立 春

久かたの天津みそらも長閑にて今朝よりかすむ春は
きにけり

鳥がなく東の空ものどかにて春立けふや霞こむらん

朝霞

朝戸明てみわたす山もうらゝかにかすみたちそふ峰

の松原

此頃はのどけさみせて朝なく／＼かすみかさなる春の
とを山

谷鶯

おのが頃と谷の戸出て鶯の花の香さそふ声も長閑し

残雪

いつしかと下もへいそぐ春の野につれなくのこるこ

ぞの白雪

若菜

もろ人の春に心ものどけさや袖ふりはへて若なつま

まし

あさみどり霞の衣たちそひてすそのゝはらにわかな
をぞつむ

里梅

吹こして余所の垣根も匂ふまで咲くや梅津のさとの

春かぜ

野外雉

妻恋のなれも思ひにこがるらんやけのゝきじの夕暮
のこゑ

わか草の妻やこもると朝なく／＼かすみ野原にぎぶす
なくなり

水辺螢

水草生ふるさはべもくらき夕ぐれにかげをてらして
ほたる飛かふ

春行ばひかりすどしくとぶほたる野沢の水に影をう
つして

夏草

賤のをもいたくなかりそなつ草のしげみに秋の花ぞ
またるゝ

茂りあふみどりもふかき夏くさの葉ずゑのつゆの色

世 近

もえならず

夏 月

夏の夜は明やすくともしばしたゞかげさしとめよ山

のはの月

吹わけて木のまもりくる月影のひかりにかよふかぜ

のすゞしき

夕 立

夕立のはれ行雲のたえまより入日さしそふかげぞす

ゞしき

杜 蟬

茂りあふもりのしめなはをりはへてなくもすゞしき

せみのもろごゑ

御 祓

年波のなかばもこへて行かはにたもとすゞしくみそ

ぎすらしも

歳 暮

月花をながめくゞてふるゆきにあとこそみえねとし

ぞ暮行

水 鳥

池水のよるのうきねにをく霜をはらひかねてや鴨の

なくこゑ

遠峰雪

見渡せばなかばは雲にうづもれてなをさやかなる峰

のしら雪

神 楽

寒けしな霜夜の月のかげふけてうたふかぐらのこゑ

ぞすみ行

忍待恋

まちくゞし今夜もあたに更過て人めやこひのせぎと

なるらん

寄月恋

ねやのうちに月はまたでもとふ物をわが身を秋と人

のつれなき

寄雲恋

あま雲の心もそらにかきくもりはれぬ思ひのほどぞ

くるしき

述懐

なにとなくあかしくらして今さらにいく春秋を過し

きつらん

神祇

天下くもりなき代のたのしさをふかくもいのるみつ

の神かき

一夜松まつにかひある御代にあひてなを行すえをい

のる神垣

○「先世詞藻」上・下巻は豊岡京極藩主や夫人の詩歌を収録

したもので、上巻は二代高任（和歌一九四首）五代高永

（漢詩一八・和歌一八〇）七代高有（和歌六五）九代高厚

（和歌二・発句五）十代高義（発句五）を、下巻は梅寿

院（高永夫人）の和歌六六〇首を収める。

梅寿院は肥後宇土藩主細川氏の女で、「豊岡誌」には「為

人婉ニシテオアリ夙ニ和歌ヲ鳥丸光榮及ビ其子光胤ニ字ビ
後又京極宮家仁親王ニ師事シテ才藻富贍ヲ以テ称セラル」と
ある。

(二) 「長閑集」〈抄〉（但州叢書）出石神社蔵

寛延二年二月兼題三首和歌

山残雪

（大石氏）
繁道

長閑にも詠ふりせぬ山の端の霞のうちに残るしら雪

（山本氏）
成常

山高み雲より滝の落るかとみれば残れる去年の白雪

（小川氏）
満為

咲そむる花かとみれば遠かたの山もまだらに残るし

ら雪

（佐世の母）
妙照

山の端は霞ながらも春寒みまだ消がてに残るしら雪

（佐田氏）
佐世

世 近

霞たつ外山のみねにむら消て去年のかたみと残るし

成常

ら雪

世をいとひ文みる人や薄屋の窓にうつろふ夜半の燈

満為

曉帰雁

繁道

名残あれや月も霞める曉の雲にうかれて帰る雁がね

小夜更てまだ寝ぬ庵の絶々の光もうすき窓の灯火

妙照

成常

遠近の山も霞めるしのめにわかれを告て帰る雁金(雁がね)

影だにも更行まゝに閑なるしのやの軒のまどの燈火

佐世

満為

立かくす霞をわけて雁金の帰るさいそぐ曉の空

更行ばかゝげもやらで燈火の影かすかなる窓の哀れ

さ

妙照

(中略)

柳泉

しの、めのかすめる空に立別れ名残をしくも帰るか
りがね

植はて(注連)しめ引わたす千町田に日も夕暮のいとまな

みよる

佐世

別路の空も霞のたちへだて名残も遠く帰る雁金

妙照

窓前燈

繁道

をこたりの窓には文のひもとかで幾夜をあたに向ふ

早苗とる五月もまたで賤の女はいとまも浪にけふも
くれけり

灯火

加代

けふもまた夕暮かけて賤の女がとる手もたゆに小田
の若苗

佐代^(世)

夕風やみどりの色を吹わけて袂すゞしく早苗取なり

(中略)

^(明和五)
。子六月兼題和歌

扇

勝蔵

夏なれやならさずとも心から扇をみれば涼しかり

けり

満為

夕顔の花咲ころのすゞしさもそへてあふぎの風をか

らばや

^(申判氏)
茂政

手にならす扇の風や来ぬ秋にかよふ夜すがら涼しかりけり

とま女

吹ぬるも猶たのまるゝ幾度もなれて扇の風の涼しさ

^(茂政の子)
茂績

みな月のあつさもしばし忘られてならす扇の風ぞ涼しき

佐世

しばしだに打もおかれずあつき日はならす扇の風を

たのみて

泉辺納涼

勝蔵

わきかへる岩間の清水底すみて移るすがたにむかふ

涼しさ

満為

湧出る泉の流しばくをむすばぬさきに袂すゞしき

茂政

立よりてむかふ泉の松の陰秋風かよふ苔の下道

とま女

底すみて見るも涼しき木の下の清水に通ふ松風の音

茂績

松陰の袂涼しくすみなしてむすぶ泉に夏もよそなる

（佐世）
さよ女

山かげや岩間をつたふ細清水たゞ一すじに涼しかり

けり

寂寞柴門人不到

勝藏

つれづれにせめて音する風ならでまれにも人はとは

ぬ柴の戸

茂績

淋しさを友と思へば山里の柴の庵は住みよかりけり

（佐世）
小夜女

ひとり住柴の戸さしの明暮をわくらばに問ふ人だに

もなし

螢入定僧袖

満為

露の身をしりてや螢昼となく夜の宿りも墨染の袖

夏 恋

茂政

おもひ出る夏に我身ももゆる哉すがたもちづに螢飛

かふ

○保田佐世が撰んだ和歌集『長閑集』（約二六〇首）『認香集』（四五四首）『昨見集』（二六五首）が現存する。年代は寛延二年（一七四九）から天明四年（一七八四）に及ぶ。
佐世（一七九四）は、綿屋（保田）勘左衛門長房の娘で山本太初の子長常を婿に迎えて家を継ぐ。母妙照の手引で歌をはじめ、京都の歌僧澄月に師事した。

（三）〔但馬名所和歌集〕へ抄

東京都・保田昌一氏蔵

○五師宮桜花

延実

うへし世はいつしの宮の桜花春風遠く咲にはふらん

勝藏

いつしかに御垣の桜千早振神も幾世の春にめづらん

千世の春懸てや匂ふいつはあれど五師の宮の花の白

ゆふ

佐世女

咲まゝにぬさと手向ん桜花いづしの宮に匂ふ春風

○入佐山秋月

延実

秋の夜も明なば月や入佐山まだ中空のかけぞさやけ

き

正基

ひきとめて見る影あれや梓弓入佐の山の秋の夜の月

繁道

円居する軒ばに影も入佐山高ねにはるゝ秋の夜の月

佐世女

出るよりしばしは雲に入佐山まなく晴行秋の夜の月

○二見浦夕照

延実

夕附日ゆづぐひのこるや波の玉くしげ二見の浦のみるめをぞ

そふ

繁道

夕附日ゆづぐひてる影みれば玉櫛たましげ二見の浦の波にこがれて

佐世女

打よする浪もかゞやく玉くしげ二見の浦に夕日いざ

よふ

○結浦釣舟

延実

こぎ遣て釣するあまがいとまなみ結の浦に馴しわざ

かも

勝蔵

うけ縄をむすぶの浦の夕なぎに釣する海人の舟ぞた

ゆたふ

繁道

海人小舟釣のいとなみ哀れ又結の浦に世を渡るらん

佐世女

うきしづみいとまもなみに年を経し結の浦のあまの
釣舟

勝蔵

○琴引山鳴蟬

鳴蟬の声も涼しきこと引の山松風やしらべそふらん

延実

勝蔵

鳴蟬のしらべにかよふ音をたてゝこと引山の名こそ

かれせね

繁道

涼しさのしらべにかよふ松風や琴引山の蟬の声々

佐世女

なくせみの声もあひあふ松風のしらべすゞしきこと

引の山

○朝来山紅葉

延実

朝来山日影に霧のはれそめて峰にわかるゝ紅葉の道

此比こゝの夜半の時雨に色そふや朝来の山の木々の紅葉

繁道

露時雨ちしお千入に染てから錦朝来の山の峰の紅葉は

佐世女

露時雨そめにけらしな村紅葉朝来の山は色々にみゆ

○白浜暮雪

延実

降積てはるゝ浪間に暮残る夕日も寒し雪の白雪

勝蔵

磯ぎわもさだかに見えてくるゝともえこそはわかね

雪の白浜

繁道

暮かゝる波のひかりやまよふらん真砂につもる雪の

白浜

佐世女

波かけて色もひとつにみえわかぬ夕暮ふかき雪の白
浜

○諸寄川漁火

延実

暮行ば諸寄川の波の上に数あらはるゝいさり火の影

勝蔵

いつとても釣するならしあま小舟諸寄川の絶ぬいさ
り火

繁道

いさり火の光になれもこがれてや諸寄川の浪のいろ
くづ

佐世女

はるゝとみる影遠きしら浪や諸寄川の沖の漁り火

○出石里松風

延実

たちつゞくいつしの里の松の風ときはの色や吹つた

ふらん

勝蔵

山近き五師いっしの里に住馴て聞も久しき松風の声

正基

いつよりか五師の里の年ふりしみとり涼しき松の下
風

佐世女

いつとても出石の里は昔なる千歳をならす松風の声

○入佐原郭公

延実

月もやゝ入佐の原の時鳥あへる名残の一声もがな

勝蔵

立出てこよひも聞む梓弓入佐の原になくほとゝぎす

繁道

一声の跡はしたへど白真弓入佐の原のほとゝぎすか
も

○三尾浦懐旧

延実

言の葉のよるべしなくば昔今三尾の浦わの名をもし
らじな

勝蔵

過にしをまた忍ぶまに老ぞそふ三尾の浦浪たちもと
まらで

繁道

いにしへの隠岐の嶋人こととへば哀をかくる三尾の
浦浪

佐世女

はるかにも聞てたもとをしほる哉昔を懸し三尾の浦
浪

安永四年乙未十二月十六日

○「但馬名所和歌集」は、安永四年十二月十六日付の稿本で、
詠者十一人のうち、当地の人物と推察できる繁道（大石氏）

佐世女（保田氏）勝蔵（豊岡藩士。高階氏）―以上「長閑集」による―延実（豊岡藩士。小林氏。「舟木家文書」による）正基（豊岡藩士。猪子氏）の五名の詠草を掲げた。ほかに祐類（山地氏）長隣（井上氏）元貞（岡部氏）―以上出石藩士。『出石町史』による―正基・堯貞・正珍・惠勲の諸氏がある。

四 「美知農記」
（由利菊隠稿・若尾瀨水写）

「木鬼」第二卷第八号（豊岡市図書館蔵）

美知農記（道の記）

ある夜の暁、予寝さめのころ誰かから櫓押もて「葡萄美酒夜光杯」と、たからかにうたひゆく舟のはやへだたりて「君わらふことなかれ」とかすかに聞え侍る。その夜おもひ出れば「古来征战幾人回」といふなるべしをとあわれを催す、我國の歌にも「いづくにも住れずばたゞす□てあらん柴の庵のしばしなる世に」また「あるかなきかの世にこそ有けれ」とよみ侍しは貫之・

西行ぞかし。その外むかしの人のいづれも、此世を
ろくおもひとり給ふに、予はおろかにかりそめの世を
ふかくかたくおもひ、名利のために病をもうけ、四十
あまり過こしかたのくやしき、又この行末もかくはて
なんことのくちおしくおぼえ、いかにもあれ洛のほと
りなる五升庵のかたへ行てかたらば、すきの道の多ん
にもひかれ、迷ひの雲吹はらひ真如の月の光も出なん
ものをと、そつにおもひたちて大渡シ(京口)の舟にのれば、
前途三千里のおもひとかゝれし事思ひ合せ、袖になみ
だをうかべ都のかたをうしろさまになして、ものおも
ひ居る折ふし雁啼わたりければ、

雁も宿恋しくなりて帰るかや

と口ずさみければ舟は着にけり。それよりかち(徒歩)を行く
に若草のあしにもつるれば、目に見ぬ我もあたりはれ
らかにおぼえて、

妻子つれてこの春の野に出ばやな

と吟じ行ほどに見開山ひだりにあたれりと人々申あへ
れば、但馬富士といへる事を思ひ出すにまことに、

目にちかきふじの高根のながめをも

しらぬ我身のうき島がはら

といつぞや聞侍りしが、今我身一人のうへに思ひしら
れてまた袖をしほる。これより駕にたすけられて江
本・伏村をすぐ、雉子あまたなきしはいかなる所ぞと
問へば、松繩手なりと申(す)

松原に千代を契るか雉子のこゑ

程なく清冷寺村につき聖天(東樂寺)に礼拝し旅路の行す(え)へを祈
る、

きとくあれこの世の望みほとゝぎす

それより寺に入、別の盃を催す中にも、簀功といふは
播磨の国の聖にて、去年の秋より風雅の友どちとなり
世のうれしき事もはかなきことも、うらなくかたりあ
ふに、此度のおもひ立(たち)もし妻子(或は)あるはす多女などの聞

世 近

なば、しばしのおかれとは云はじとおほへぬれば、かの庵に聖を送りにまからんとなくさめおきて出ぬ、貴き御身をいつわりし空おそろし、

はづかしや狐になりて木下闇

かくつよりて勘介なるおのこに筆をとらせ、かの聖のまへにさし置、是より都に趣んといひ出ければ聖うち驚き、かかるそ、たつの出たちこそ心得ね、まづ我庵に伴ひ申さん、都のぼりはかさねてこそとのたまひぬるに、おもひよらざる御言葉にこそあれ、人の命の無常なることは山の水よりも過たりとつねにしめされしものをといへば、さすがにいふ事もなくてや、

いかにせん春には別れ君にまた

と饒別し給ひければ、わかれていそぎ本道に出、こゝはいかなる所ぞと問へば、五条村といふ、

夏ころも着て里の名ぞまづうれし

島・水上・長砂を過、出石の城下に入、卯月の空なれ

ばまづほととぎすなみて、いるさの山の端をおもひやりてみちすゝまず、されどしるべの家立よらばいかにと云んもはづかしと、

一夜寝はきくべきものを時鳥

また城のあたりならん鉄砲の音のしきりに聞へければ、胸とどろき病おこりてくるし、

野に死ば花つむ僧をたのむべし

それより重三茶屋にてしばらくつかれを休メバあじ山といふにかゝる。海辺七八里□りてまれなる山の名なり。幼きものゝむかしばなしに此所にて鱒つりしなどいふなることおかし。又此道のほとりにさる石といふあり、男の家に行女はこの石のまへを通さずなどかたりければ、

此石や誰か撫子に見かへられ

寺坂にいたり日暮る、されども宿かす人なければ、三ヶ月のおぼつかなきに心細き谷水の音聞てゆくに、ひ

よくといふこゑするあり、駕の男共のひとりには黒かわづといふ、一人はくすといふ魚なりといふ。水底のことなればいづれさだかならん。矢根村といふに宿を求む。麦秋の比なればとりちらせし家のさまの旅なれぬ身の心うし、かの執筆のおのこ旅の日記とり出で、今朝より春の句一二句見へたりいかゞの事にやといふに、さればわれはひたすらに都こひしくのみ思ひ、ここにあらざればたゞ思ひをのぶるのみと打わらひて寝る、翌る朝故さとの妻子叔父の方より人あまた来りて、京へ行事よからずとていたくとゞめければ、

心なやさへずるばかりぎやう(よ)しきり子

子父母なければ、年ころ此老人をたのみたるに、その詞にそむきなば不孝にもなりなんものゝ、されど「月もながれをたづねてぞすむ」といへる鴨川の清き水の味をもしらず果なんやと□し、

夏草(う)もふ此道(通)はとふるまじ

またさまぐの事などおもひ出て、

たのしむや水の子(はうから)枝の蟬

と世の人をうらやみ、あるは文章法師の心にすかせたる身ならばいかでかゝる物うき世の中には生れ来らんと書れしをも吟じてはなみだをぬぐふいまは、かゝる物おもひわするゝは此ものにすぎじと、道の程酒吞つゞけて我宿に帰り、たゞ夢のやうになりてたふれ隊、暁にいたり、酔さめうつゝ心になりて妻戸を押あけ、籠鳥の雲をよぶおもひもかくやらんと都のかたをむきて、

いつ迄か老鷲のかこすまひ

○(1)由利菊隠(一七四一―一七九八)は通称三左衛門、四歳で父を失い六歳で失明、以後病弱の上相次いで近親を失う。この稿本は明治三十五年ころ、俳句研究家若尾瀾水が由利由人から借覧した菊隠句集稿本の中にあつたもので「文藻見るに足る」として由人発行の「木兎」に載せたものである。天明六年四月の起草。

(2)「葡萄ノ美酒……」王翰の涼州詞から

葡萄美酒夜光杯 欲飲琵琶馬上催

醉臥沙場君莫笑 古來征戰幾人回

(3) 「洛の五升庵」京都の俳僧蝶夢(俳諧の師)寓居

(五) 「懷花庵・享和三年癸亥歲句帖」(抄)

豊中市・八木寿栄子氏藏

元日 雨、二日 雪、三日 雨

かくふり続くを御さがりと唱へて吉瑞とすれば

御さがり(おのおひとくさ)や蒼生の貢とし

飾りつらなる九重の門

万歳(えんざい)の多(おほ)ぼしに鳥(とり)の腹すりて

ことは此鳥の遅く告わたりければ

聞(き)だけおくれ花のはつからす

日すからから風の吹ささむ風情は都めきて町小

路(みち)の土を閉(ふ)、往かふ人々草履(ぞうり)雪駄(せつた)の音するこそ

天つちの流行とやいふべき

世とともにさかしき春のこほりかな

春の雪ふり忘れつゝ道氷る

嘯(ささ)のもるる築地や猫の恋

湖南(客)のまらうどのはじめて予の懷花楼に参り玉

ふに廿とせのむかしを語る

まづ問(は)ん三井の鸞志賀のはな

かへし

みひらき(三)のふじ(開)や三上も春かすむ

千影(三井寺)法印の城崎に下り玉ふ浴舎を訪ひて

温泉(ゆ)心もよしや薬師の花匂ふ

蘭の画讃 鷺橋(南条氏)需(む)

らんの香にまたるる君や朝あらし

千影子浴中探題

若鮎(へ)の初穂備ん梅の宮

花守の舞は狂歌をしらぬ貌

松とりて人静なり春の月

藪入や米(稻米する)しらげをく親ごころ

春の野や腹重たげに昼狐

うき人の前にも遊ぶ胡蝶かな

仲国(謡曲・小督の源仲国)の馬もねぶるか朧月

(竹田・法橋寺住職)魚潜上人の古稀をことぶくに我も(やが)頓てあやから

んことを

七宝の花は奥あり花の友

五宝何かしが婚礼を祝して

幾春の宝結びや松と梅

き(如月)さら(如月)ぎ廿九日ふたゝびゆ(海鳥)しまへまかりて千影

子の旅立を見送りて

菅笠も見せぬ霞の余波(なごり)かな

行雁や嘶(なごり)尽せずたまりける

そのかへさに薬師の花盛を

せんじ茶のうすぎ花香や朝ざくら

散えだに咲憐ありけさの花

匂ひこぎ花の香は四つの日かげかな つね

てふ(録)くもひとつふたつや朝ざくら

朔日の花を見せしぞ紙ひゝな

此日順風にて庵にかへる

はしり帆や折々寄する浪の花

三月尽の日、蘿木入来

行春や葉にかくれたる花のえだ

山ほととぎす巢に籠るらん

若鮎に鞆の銘酒を贈られて

袴をとれば咄くつろぐ

来る年も雇れありく月の頃

ふたつの籠の虫えらむなり

太秦の祭の客をもてなして

逢ふて嬉しきしるもしらぬも

髭風

蘿木

風

木

風

木

同

風

世 近

わが恋は衛士の焚火の定めなき

局賑はし卯の刻の雨

東皐(髭風長男)

木

袷の肌に風めづらしき

くれて行空は日和の雲見えて

東皐

主

芍薬のはなさまざまに咲立て

風

月の頃とて粟に実の入

柚蓮(由利氏)

俵に作る法花経のいし

木

鹿を追ふ獵師は隙もなかりけり

主

秋の月髪を下せし權太夫

皐

露の隣の斧戻し来る

来

此村ばかり十分の稲

風

漁釣(はせ)にきのふもけふもいざなはれ

木

八朔

又晦日(ごもり)に家賃乞はるゝ

皐

八朔や千町の稲のはなもみち

花盛窓は夜明の早うなり

木

此秋やよごれぬ稲の品さだめ

老を忘るゝまらう人の春

風

仲秋九月分題

月さして一もとづゝの薄かな

笙風

四月朔日蘿木ぬしを送りて

木

油減る夜となりけり萩の音

木

行春の余波(なごり)もあるに卯月まで

木

音もせず雨のふる夜や鳴のこゑ

髭風

四月二日湖南五来(福田氏・大津の人) 若州廻り橋立順覧にて草庵

木

眼のうとき人にまかせん鳴子かな

木

着、三日社中出會、懷花樓興行、(懷花社)

木

宵闇や袖は薄の露なりし

東皐

しばらくの夢も花なり青すだれ

五来

十四夜のこと葉

わが懐花楼は月雪にわたるをもて名とせし物か

ら、いつも待よひには、月の有無によらず友と

ちをまねき、はいかいの席をもふくるためしと

は成しぬ、そも事ふりにたれど、楼の前には長

き流をおひ、月のさし出れば、風おもむろにそ

よぎて、こがねの波をよする、漕登る稲舟あれ

ば、さし下す竹筏あり、その色のみどりふかき

も月待よひのそなへなれや、さればむかし貫之

卿の「水底の月のうへよりこぐ舟の棹にさはる

は桂なるべし」と詠み玉ひしけしきにも似かよ

ひたらんか。ことしも命ありて此会を催し、人

々と句を練ること老のよろこびの玉ものともい

はんかし、

待よひや棹の雪に魚沈む

澄月の影をはこぶやさくら波

八月十四日雨風あり、昼より晴ながら無月

歌仙 懐花楼興行

待宵や棹の雪に魚沈む

霧晴わたり草にふく風

司召樵夫の唄のうき立て

ただ賑やかに雀ざはつく

灘つゞき塵も置かざる砂の色

心長閑けき酒の酔ざめ

女房の里から春の礼に来て

夜なべにかけて風の糸よる

時ならぬ大八車くはた／＼と

風のからすのさまよふて飛ぶ

俤は尽ぬ思ひに立残り

糞ぶきの屋根を瓦に差かえて

糞ぶきの屋根を瓦に差かえて

髭風

如幻

東臯

笙嵐

釣水

蓼舟

柚蓮

野牛

麦舎

鷺橋

如幻

蓮

風

半夏の後は月のすゞしき

松堂

関屋なりにし秋はいつかも

幻

本草にもれたる草の名を問(は)れ

牛

物書てわざと扇を捨て行く

舟

蜂入かはり花の蜜吸ふ

蓮

尊き僧としらで別れし

卓

何かしの遠き跡訪ふ弥生そら

風

けふもまたおどりの影のわすられず

堂

暖過て匂ふ玉味噌

橋

弓弦を張て立かけてをく

蓮

木枕に一夜寝かねし宇都の山

蓮

夜神楽の遠音も花の男山

幻

ひねの煙草の残りすくなに

嵐

古きむかしを伝ふ春風

筆(執筆)

此頃に隙を出したる手代とも

卓

おろかに契る四位の神主

蓮

九月廿四日 (丹後熊野郡) 日間の浦吟行日記

貫之の筆には墨のあたらしき

幻

淋しさを驚しけりむらもみぢ

年も暮行雪のたそがれ

牛

色かへぬ松は日くれてもみぢかな

かれく鷹の鳴音のするどさよ

水

行秋の余波を雨に譲りけり

草にかふれしあらしこがすね

舎

久美よりわたる舟中

(まなぢ)宛に母につかへて誉らるゝ

風

行秋や酔のさめたる江のあらし

京をよき程離る一つ家

舎

九月廿五日

ふつつかに鼻のなく薄月夜

蓮

鶏に寝覚て聞くやあぎのあめ

世の中の花はくくと菊作り

風ふかぬ三輪のやどりや露しぐれ

九月廿六日

三番の餅はちいさき亥の子かな

寒きくの匂ひかくすや炭たはら

洞床に室咲の梅いけにけり

九月廿七日 松蘿亭

色かへぬ松にすぎなき実ばへかな

九月廿八日

茶の花を折るべからずと尼の筆

九月廿九日

大菊の折残されて初しぐれ

時雨来て燈心売の這入けり

山伏の屋根かしかまし玉あられ

十月四日 久美浜へわたりて十とせぶ(年)り稲葉氏

の華屋を訪ひて

近付の庭の冬木や別座敷

斗栗亭へ招かれしは六日也けり

(ももやし)
響(な)に春をみせけり冬の友

留錫中探題

朝々に雫しにけりかれ柳

恋わびし(はた)こともありしに(カ)滑火陰

山守のやまに入けり冬木立

山茶花や一ひらつ(カ)つに咲かふせ

牡丹餅に後の世うけし十夜哉

木がらしや吹残されし朝鴉

看経のゆるむ木魚や朝千鳥

朝千鳥鳴かずにつたふ磯辺哉

(義仲寺・芭蕉忌句会)
時雨会奉納 社中たんざく写す

翁忌や心のたけの時雨さく

あかぬ間を又やみにけりむらしぐれ

カスミ
枝鳩
蓼舟

一時雨何のけもなき木の間かな

蒲丈

松ばかり時雨をふくむけしき哉

可イ

吹れけりかれたる中の枯尾花

麦舎

木がらしや路に白雪吹とづる

穂庵

荻かれて今は身に添ふあるじかな

子通

水さえも眠るときくに網代守

釣水

鰻喰はぬ人揃けり納豆汁

笙嵐

神々を送しあとや初しぐれ

柯松

かれ残る水草寒き門田かな

椿寿

山茶花や蜂来ぬ日とはなりにける

東臯

落葉焚ておちばの音を聞夜かな

春翠

翁忌やとしに色ます柿みかん

髭風

人の来ぬ夜は着てみたる紙子哉

鷺橋

翁忌や題を探れば枯尾花

恒女

道の辺の仏あらふや夕しぐれ

杉溪

桃柳さくらおもふて冬ごもり

斉女

稲垣のうらまで来たり初しぐれ

華蕉

右廿六葉 十月廿日認出す、□□

藪巻て窓に入日のさしにけり

蝶眠

義仲寺世話人大津千影子へ向遣す

雨二日ふとりくみてみそれけり

木処

人生七十古来稀なりと聞えしふることのあなる

夏ならば寝なまじものを磯の鴨

野牛

に、おぼえずその春を迎へしとて親しき族がこ

かれくただだ広き野の寒哉

二石

とぶぎをのぶるに

梅が香も添ふて室出る納豆かな

木二

耳もよく眼もよく活てまれのはる

髭風

草も木も枯てすげなし冬の月

二春

おのく名所に寄せて祝ふ

枯尾花一むらさはぐ風の筋

野草

周防国 七重八重節着重ねん祝ひ嶋

内子(妻) 恒

山城国 古道や千代を囀る朝ぼらけ

男 次璉

丹波国 七草を生野の里にはやしけり

嫁 須磨

下総国 千代結ぶ千葉野のはるや糸柳

姪 古濃

遠州 菊川や七百歳の春を見ん

孫 茂孝

丹波国 みどりたつ峰七合や千とせ山

嫡孫次興

紀州 杖とりて貝よせやせん若(和歌)の浦

孫娘千久

むかしのちなみをわすれず都辺の人々より保喜(ほぎ)

ことありしをひかふ

八十六(大伴氏)叟大江丸

七十二(伴蒿蹊)叟閑田子

重厚(井上氏)・菊二(井口氏)・瓦(稻)

全(原氏)・甫尺・千影・杜陵(福田氏)・五来(福田氏)・岸溪・宇洋

順列齡を尚ぶ

注文

一大奉書二つ折 六ツ畳み

一前書より三四句かけてばら

のしに橙の画彩色

一上包美濃紙袋

上書 古稀のはる

数 百弍十枚

右の通正月廿日到着の積、□□へ被仰付可有事、

極月十三日夕

髭風

瓦全叟

○「懷花庵歳句帖」は、福井髭風を中心とした社中の享和三
年(一八〇三)の俳諧記録である。

○髭風(一七三五〜一八〇九)は通称丹後屋八郎左衛門、酒
造業を営む富豪で、京都の蝶夢に師事したが、このころは

既に隱居の身で、その居を懷花庵と称した。その社中は主
に当地の富商や地主で、経歴分明の者を挙げると、東阜

(髭風の長男連) 鷺橋(南条氏、通称二万屋又右衛門) 蓼
舟(保田氏、名は長明) 袖璉(由利氏、名は茂潜) 恒女

(髭風の後妻) など。

○京津の俳人たちとの交流も盛んで、蝶夢没後はその高弟柏
原瓦全(京都の扇屋。五升庵二世) 西坊千影(三井寺円満
院住持) 福田五来(大津の蔵役人) などと交際した。

(六) 「文乃都豆麗」〔抄〕(但州叢書) 出石神社蔵

。和歌（短歌）

乙丑春試筆 文化二年 春 六首

千早振神代もかくやあら玉のとし立帰る今朝の長閑
さ

立 春

はるたてばふりつもりにし白雪もまたき野山の花と

こそしれ

うぐひすを聞てよめる

としごとにかはらず来なく鶯の声は老せぬものにぞ

ありける

雉 子

狩人のゐるともしらで高まどの野辺の雉子きぎすの声立て

なく

雨 中 花

ふる雨にしほれながらもあし引の山のさくらはいま

さかりなり

松上霞

しほかぜもやはらぎそめて浜松のみどりのうへに霞
たなびく

軒の橘の花の美ければ 夏 五首

我宿のはなたちはなのほひをもたづねて来なけ山
ほととぎす

夏 風

花ちりしのちは淋しき山里の木陰すゞしく風ぞふき

ける

五 月 雨

夏山のみどりもみえず五月雨の空かきくもる日ごろ

なるかな

浦納涼

さゝ波や嶋の海辺にやすらへばふきわたる風すゞし
かりけり

夏 草

八重葎(はやくも)しげれる宿は夏の夜も萩吹(はぎ)かぜに秋かとぞ思

ふ

立秋

秋 五首

けふよりは秋来にけりとおもへばや萩の葉風のいと

どわびしき

葬あさか

朝な朝な咲あさがほをはかなしとおもへどけふも花

ぞみえける

結浦雁

誰がつけしふみもて来らむしら波のむすぶのうらに

落ちるかりがね

河 霧

影うつる月をめづれば小夜更けてむかふ河辺にたつ

霧ぞうき

岸紅葉

夕日影しはしうつらふ水のうへにきしの紅葉のかけ

残りけり

初 雪

冬 四首

山姫のみぢのにしきぬぎかへてうす雪ごろもかつ

ぎぬるかな

雪 暁

あり明の月は入佐の山の端に残りて清きあけほのの

ゆき

雪中旅行

かきくもり雪ふるさとは道しれるひまゆく駒にまか

せてぞゆく

歳 暮

いたづらにくれゆく年のはやければ我くろ髪もたの

みなぎかな

友の旅立玉ふによみておくる 雑 三首

春霞かゝる朝来の山の端をふりかへりつつ見てや行

くらむ

村尾何かしの初冠を祝ふ

万代の君がためにと折うめはいろかもふかきものに
ぞありける

はらからの喪にこもりける折から来迎寺上人の

訪ひ玉ふを悦びて

法の師にあひてかたればなつかしきほとけの国のた
よりとぞおもふ

。和歌（長歌）

歳暮述懐

きのふけふ ながれてはやき あすか川

その月も日も 帰らぬを 人はさぞとも

しらまゆみ 引もとどめぬ いのちもて

千代ぞと祝ふ あら玉の 年のをほりに

なるごとに 雪も我身も

ふりまさり

ふりつむ雪は 消ぬれど かしらの雪は

つれなくて 三千丈にしも なりゆかん

その老もはや ちかよいて むかふ鏡に

吾かしら 桃の林の 色なして

みるもはづかし いたづらに 身は埋木の

かひもなく 此まゝ朽ん かなしさよ

名をあらはすも 孝ときく 孝の一字を

忘れずば 亡き父母の よろこびの

顔見るこゝち せんものを たゞ慎しまん

つゝしまむ わがひとりぞを 慎しまんとぞ

菊の宴（九日の当座による長うた）

我やどの 籬に生ふる 翁ぐさ

えならぬ色に 咲にほふ はなのさかりを

すゑのよの 今もむかしの あととめて

古ことの葉の その中に からの国には

千とせまで いのちたまちし 人のありと

聞ものからに ながつきの けふのこの日に

おもひ出て　むつみあひける　ともがきと
菊を見がてり　酒のむわれは

。発句

我背戸にとまって居たか初からず　春　十句

おとなしく兎もあそべ松のうち

山鳥の尾を曳くあとの木の芽かな

簾入のうぐひす来よとはしあかな

あたたかな日や寒き日や梅の花

朝風呂に散て来る也山ざくら

出嫌の隠居に逢ひぬおぼろ月

やゝあって細き声あり落雲雀

夕ぐれをたぐり寄けりいかりほし扇

山かげや黄色に朽しはなつばき

酒買うて座敷を借る牡丹かな

ふり袖の女うたよめ合あひま飲の花

夏　七句

山寺の鐘の色なり青あらし

六月や硯の水に雲をみる

鶴の脛かくれて青き田面かな

汗つたふ髪のみだれや田草とり

雨やんで顔ふりあげぬかたつむり

いつの間に月は越たり天の川

墓原を離れぬ盆の月夜かな

鹿なくや山にしみこむ夕煙

朝顔や蔓の末なる貝わり菜

くし柿の皮むく宿やきりぎりす

待宵や筆あたらしき硯箱

菊咲て萩にはうとし人ごゝろ

ちぎれてはまたあつまりぬ秋の雲

はつ時雨夢に越けり伊賀の山

牛市の声高になる時雨かな

冬の蠅硯のうみに入らんとす

秋　八句

冬　七句

雪晴て限なき月の夜半かな

ひそ／＼と夜の雪かく小家かな

寒月や着ぶくれし我がかげ丸き

枯あしやうちまはしたるみをつくし

芭蕉堂を拜し奉りて

雑の部

月雪の魂さづかりしおもひかな

(中略)

妻なる人の身まかりけるあるじ東走をいたみて

秋雲や母となく子を膝のうへ

神無月中の八日空清らかに晴ければ、温泉の里

に相撲見に行んと、屋形ぶねにうち乗けるに、

何かしの人々も膝をならべてとき棹さし下

るに、来日が嶽の峰うちくもるよと見えしが、

つかの間に時雨来てなみ松の音高く、かりがね

つばさをみだして白鷺洲崎にさまよふ、北風に

追るゝふねは、真帆かた帆もちて風情興あり、

さま／＼見やるうちに、船屋かた頼にもり出し

ければ、菰よむしろよと手々にかつぎしらなみ

を左右にみて、

水どりよその毛衣のうらやまし

「明てこそみめ」と聞ゆる磯辺をよぎりて

時雨るゝや二見の浦の朝げしき

兎や角といふうち船さし寄せれば筆をさし置

て

冬かれはしらぬ里なり温泉の匂ひ

○「文乃都豆麗」は南条鷺橋の家集で、全四巻から成り、国

文約一五〇編・和歌約二〇〇首(内長歌六)・発句約一三

〇〇句・俳画二五葉を収めている。

鷺橋(一七六七～一八三四)は通称二方屋又右衛門、字

を思邦といい、錦楼また夜雨庵とも号した。国文と和歌を

伴蒿蹊(閑田子)に、俳諧を蝶夢(五升庵)に学んだ。こ

の家集の成立は文化年間の終り頃と推測される。

○「明てこそみめ」―古今集所載、藤原兼輔の次の歌をさす。

夕づく夜おぼつかなきを玉くしげ
二見の浦は明けてこそみめ

(七) 〔蕉雨園集〕〈抄〉(但州叢書) 出石神社蔵

。春歌の部より

曉立春

告げわたる鐘ものどかに鳴りにけり曉よりや春は立

つらん

鶯告春

咲ぬべき花よりもまづ鶯の声の匂ひに春をこそしれ

花

古りゆくは見る人ばかり春ごとに同じ色にぞ花は咲

きける

(妙法院宮)
宮花御覧じける御次にさぶらひしに「ともに今

日ことばの露のちぎりあればいくその春も園の

花見よ」といふ御歌をたまはせて、御返し仕う

まつれと仰せごとあるに、かしこさもうち忘れ

て詠みて奉れる、雨の降る日になんありける

たちぬれて我が世経ぬべし万代も君がみそのの花の
しづくに

宮嗟呼きこの御亭の花御覧じおはしますに、召し出

だされて歌つかうまつれと仰せごとありければ、

蒿蔭(伴)「遠近の山の霞のもよほせばまだき咲きぬ

るみ園生の花」と読みて書きつけける、同じひ

とひらの紙に

御園生の花の盛りに逢ひぬるを鶯さへもうれしとや

鳴く

古寺残花

散り残る初瀬の山の桜花鐘のひびきもいとほる(嫌)か

な

。夏歌の部より

更衣

花染の袖にあかねは夏衣着ても心は変らざりけり

世 近

加茂の競馬を見て

いどみ合ふ馬の心に乗る人のおのづからにぞ徳は見
えける

。秋歌の部より

城崎の湯あみせむとて二見浦さして漕ぎゆくに、

かの兼輔朝臣(麻理)の明けてこそ見めと詠み給ひし古

事など思ひ出でて

舟下す行くへも見えず二見潟明けても暗き浦の朝霧

かくて舟道遙しつつ城崎を行くに、霧の絶え間

より舟の帆のはるかに見えければ

晴れぬるか我より先に行く舟の帆のあらはるる川の

朝霧

秋山の影見る水に行く舟はもみぢのうちに漕ぎぞ入

りぬる

月

常よりもことにまされる光かな月は秋こそ見るべか

りけれ

山中月

人の見ぬあら山中も秋の夜の月は光を惜しまざりけ

り

。冬歌の部より

初冬霜

秋過ぎて露もまだ干ぬ道芝に霜を結びて冬は来にけ

り

落葉有声

散り乱る木の葉の音ぞ絶え間なき枕の山の夜半の嵐

に

初雪を見て

珍らしと都の今朝の初雪にまづおもひやるふるさと

の空

。恋歌の部より

初恋

余所にのみききわたりつる涙川けふこそそでになが

れそめつれ

寄風恋

おもへどもえこそたのまね吹風のあしたゆふべにか

わるころろは

。雑歌の部より

宮の御兼題に天といふことを

あふげどもしられざりけり草も木ももらさでめぐむ

^(天)
あめのころろは

ほし

月影のくまなきよりもなかなか(星)ほしの光ぞ身には

しみける

ある亭にて小沢翁(音鹿)「ここにきてみればつらなる

みね(峯)おほみ常にむかへる山としもなし」とときこ

えしに

つねよりもつらなる峯のおほかるはけふは(背)そが(面)ひに

みればなるべし

山家夢

いとひこしころろやあさき山住のゆめはうきよにな

ほかよひけり

たちまより京へのぼらむとて出石の里を(入)行く道

にて

秋霧のふかくたてるや梓弓(入)いるさのやま(佐)のあたりな

るらん

。哀傷の部より

父君(実父)うせたまひぬとききて、いそぎてやま(大)と(和)に

ゆく道にて千年山をみて

世 近

くらぶべきおやのよはひのつきしかばちとせの山も
みるかひぞなき

やまとぢにいでたる日

なきあとにとひてしくればたかとの山をみるにも

ねぞながれる

○「蕉雨園集」は前波黙軒（一七四五～一八一八）の家集で、七九四首を収める。黙軒は、大和高取藩中谷氏の出で、豊岡藩前波正瞭の養子となる。家老として藩政にたずさわつたが後、職を辞して京都に住み、歌道に専念した。京都・小沢芦庵の高弟。

(六) 「蕪韻草稿」福井理（抄）

豊中市・八木寿栄子氏藏

○文政四年辛巳開歳余值古稀賦此自寿

新年佳色入茅堂 齡值古稀先引腸

水鳥声和江面暖 檐梅蓓破座辺香

生来憂喜詩千首 已往居諸夢一場

更賞腕花扶寿味 清風習習腋間涼

○恭奉寿 執政猪子君七十初度

年齒古稀天取賜 其勲其德并三秀

開筵龜鶴山城間 猷寿更期龜鶴寿

○龜城・鶴城、并山名、在豊岡統内南北

○阿州福島宗威医伯、寄自画墨梅二張、一以貽予

一以需題詩、因書一絶、以奉還

潑墨不須候艶陽 梅花開処吐春光

春光一樣分南北 滿紙終年不斷香

○春日郊行 ○次梢雨韵

万頃青郊望眼除 乾坤春意十分加

煙畦老圃耘鋤勉 雲径掃樵斜担荷

晴雨堤頭開媚柳 遊禽梅杪啄残花

物光多少収詩料 警句一聯留酒家

○ (文政五年) 壬午二月廿一日

赤松崔山逸士始過訪草堂

戲賦以呈 ○逸士者備中人、今住江府、善書画而有酒德
句中故及

一括煙霞囊裡春 從情書画又芳醇

遊人雅韻誰知得 磊落蒼茫自在身

○杜公句、磊落衣冠地、蒼茫土木身、因云及、

○石城教授東門先生枉駕草堂席上賦呈

憑君涼吹至荒籬 為掃小樓勸酒卮

藟苔池頭花始發 展箋敢乞愛蓮詩

(文政七年)
○甲申詩毫

幽棲元日自悠然 巧囀春禽呼懶眠

七十有三機未息 起迎烏照卜新年

○春寒甚草堂述所見

雨雪連朝風亦狂 庭梅誰弁蕾含香

前川春漲波如馬 習水狡僮苦渡航

右伏奉乞 点定

南涯老先生玉案下

甲申如月 福井 璣 再拜

○福井璣、東臯とも号す。酒造業、丹後屋八郎左衛門・髭風の息。詩は岡田南涯に学んだ。「蕪韵草稿」一二六首の中から抄出。

(九) 「雜詠十一首」久保田精一 舟木直温氏藏

無害舟木兄次其言志之句

欲醒世上醉人眠 遙慕英雄千歲前

男子因甘車裂戮 断然不学閑遊仙

其二

男兒幾歲枕戈眠 夜々夢飛慮艦前

日本從來重節義 不随彰祖学神仙

其三

幾年久欠就安眠 社稷大患咫尺前

世上懦夫真碌々 此時猶說酒中仙

其四

丈夫当覺世人眠 腔血要濺君馬前

青溪道士成何用 深鎖洞門独学仙

其五 用眠字為句

臥竜幾歲蒼溟眠 只管世人醒与眠(力)

天下誰能三枉駕 憤然攪破洋夷眠

其六 又用眠字

奴虜從來伺我眠 滔々宇宙人如眠

何日夷氣全私去 清明風裏更安眠

其七 用前字為句

神州銳卒固無前 何事逡巡独不前

誰厄犬羊胡虜徒 男兒屍暴錦旗前

其八 又用前字

挺身豈顧後兼前 奮擊何憂離不前

精魄永為東海浪 虜航破却万軍前

其九 用仙字為句

姑射山中避世仙 從來此客無用仙

無用之仙猶尚可 世間齊学酒中仙

其十 又用仙字

粉々邪說託神仙 来往自称謫峰仙

元是狐媚狸惑術 世人何事信偽仙

其十一 又用仙字

金砂化得法称仙 能丈此身為寿僊

諸見日東忠義芽 奏功(ついで)孰若煉丹仙

前日辱被示言志之高作一首幸甚々々若其文字則不敢

論焉雖然其為言英氣勃發滿胸不平々々氣見于筆下精一

讀一過不覺感激涕下遂賦燕作十有一首以汚高句云頓

首々々、

五月五日 (久保田) 新精一 再拜

舟木君足下

○久保田精一(一八四二—一八九八)豊岡藩士、字は執中、号損窓。藩学稽古堂学長。文部省出仕。私塾成蔭舎を開き、宝林義塾の塾長をつとめた。